

留学報告 4

県立広島大学 保健福祉学部 理学療法学科

小武 悠

【留学中の生活】

学部4年の最後に休学をして留学したため、卒業のタイミングは同期とずれ、覚悟はしていましたが、留学の最初は本当に寂しかったです。デンマークに飛び立つ飛行機の中で、このまま関西空港に帰りたいと思っていました。いざ、到着したものの、キャリーケースは届かず、Wi-Fiも繋がらず、さらにその日の宿はデンマークではなく隣国のスウェーデンに間違えて予約をしており、「これが留学か」と身にしみて感じたのを覚えています。こういった予想外のことが次々に起こり、臨機応変に対応しなくてはいけない機会がたくさんありました。当時の自分はピンチの状況でしたが、今思えば、その時の経験はアドベンチャーみたいでとても記憶に残っています。「学部で留学に行くのがいいのか、資格を取ってから留学に行くのがいいのか」といったことをたまに聞かれますが、留学前の私もこのことで迷っていました。私自身は、学部の頃に行ったからこそ、理学療法にこだわりすぎず、一般的な視点で留学を経験することができたと思います。私の知り合いの方では、理学療法士の資格を取ってから留学に行かれる人が多く、その方達を見ていると研究や実践的なインターンができていたようでした。

デンマークに留学に行って、驚いたことの1つに「街中のハード面のバリアの多さ」があります。留学に行く前の私は、デンマークではバリアフリー化が徹底されているものだと思っていました。しかし、道路は石だたみでこぼこしており、電車には高い段差があり、日本の方がハードの環境としては整っていると感じました。さらに印象的だったのは、自然に周りにいる人が車椅子の人やベビーカーを持つ人をサポートしていたことです。どこからともなく、スッと車椅子の周りに集まって担ぎ上げる姿が日常的にありました。



私は、約6ヶ月の間、Egmont Højskolen（エグモントホイスコーレン）という教育機関で生活し、その後2週間の理学療法のインターンシップを経験しました。デンマークにはFolke Højskole（フォルケホイスコーレ）と呼ばれる特有の教育機関があり、ここでは人間教育をテーマとする教育が行われます。高校を卒業しばかりの人たちや大学、社会人を経て来る人など様々であり、それぞれが自分のしたいことはなんなのかということと向き合うための場です。通常の教育課程の学費は国によって賄われますが、フォルケホイスコーレは通常教育課程には含まれておらず、学費は個人が負担します。私が留学したエグモントホイスコーレンはそのなかでも、障害のある学生たちのためのフォルケホイスコーレであり、障害のない学生もアシスタントとして学校生活を送ることができます。学校は原則、全寮制であり特別な理由がある学生以外は全員が学内で生活をします。



エグモントホイスコーレンは学校ですので、授業があります。しかし、それは普通の日本の学校の授業とは異なりとてもクリエイティブなものばかりでした。ノルウェーまで行つての登山や、パブリックスピーキング、カヤック、陶芸、デモ活動、アフリカンダンス、DIY、ゲルと言われる家づくりなど、机に座つての授業する機会は少なく、実際に手や口を動かしてするものが主でした。初めは、ただ楽しくのんびりと授業を受けていたのですが、途中からその授業の意味をひしひしと感じる機会が増えました。授業では登山やカヤックなど、特に障害がある学生はトライしたことがない場面に多く出会います。そこには未知数な要素も多く、あれが足りない、サポートがうまくいかないなどの課題に、ほぼ確実にぶつかります。エグモントホイスコーレンでは、意図的にそういった課題に直面させるための環境をつくりだしていると思ひました。そして、この課題に対しての向き合い方に、デンマーク人の性質というか人柄があるように感じました。例えば、入学初日に全学生でウェルカムパーティーがありました。そこでは、車椅子の学生や手足の動かしにくい学生がいるにも関わらず、激しいダンスをする機会がありました。まだ、デンマークの雰囲気慣れてなかった私は、もし日本であれば、事前に誰もができるような、歌などのアクティビティーに変更するだろうなと考えました。しかし、デンマークでは踊れなければ、周りが車椅子を回してウィリーさせたら楽しいんじゃない？ とか、単純に二人がかりで支えてあげれば参加できるとか、そういったアイデアが次々に出ていました。やる前に深く考えず、とりあえずやってみる。やりながらぶつかった課題に対してアイデアを出す。私が今まで経験してきた環境と比べて、日常の中でのトライ&エラーの回数が圧倒的に多いと感じました。一方で、全てのアイデアがうまくいくわけではなく、その過程では車椅子から落ちたり、なんどやっても結局できないことも、もちろんありました。エグモントは、工夫次第でなんでもできるというような無責任なきれい事で終わらせるのではなく、本人がやってみたく

いう意志を尊重してできることは最大限やってみる、だけどうまいかないことはうまいかないという事実と向き合う機会を提供する場でもあったと感じました。



このクリエイティブさは困難に直面した時だけではなく、シンプルに日常生活を豊かにするのにも役に立っているようでした。あるパーティーの時に、障害のある学生のアシスタントがパートナーの新品の点滴バックにビールを入れたら一気飲み用のツールができるんじゃないかという提案をして、二人でそのバックを使って一気飲みしていた時はその発想力の制限の無さに心が軽くなりました。周りの人がどう思うのかといったことの前に、自分自身は何をおもしろいと思っているのかが個人であって、なおかつそれを積極的に周りと共有する中でベストな答えを見つけていくというのが自然な形でした。これは、ほんのごく一例で、車椅子の学生を二人で介助して寒中水泳したり、車椅子で木登りやボルダリングをしたり、さまざまな場面で創造性がデンマーク人の文化なのだと感じました。

留学の最後の2週間は、理学療法士の方にインターンとしてつかしてもらい、頭部外傷後5年を経過した方のリハビリテーションを担当させていただきました。その方は身長2m、体重100kgであり、日本ではなかなかできない貴重な経験をさせてもらいました。最初の歩行練習の時は、私自身に力が入りすぎて、うまくできませんでしたが、担当の理学療法士の方やご本人とコミュニケーションをとりながら、後半はスムーズに介助ができるようになりました。理学療法の具体的な内容として、大きな違いを感じることはありませんでしたが、私がこのインターン中に印象的な場面がありました。それは、理学療法士と介護士の方たちが、共通の目標を設定して密にコミュニケーションを取っていたことです。理学療法士から介護士へ、前頭葉機能の障害で食欲が抑えられず体重が増え、それが歩行に影響しているから食事の際は摂取量に気を配ってほしいといった目標のための要求をしたり、介護士からその日の睡眠状況などを聞いて理学療法の内容を変化させていました。

